島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第1巻，129－134，2007

ラベルワークによる連携講座の意義と課題

吾郷美奈恵・石橋　照子・梶谷みゆき
山下　一也・福澤陽一郎・奥野　元子*
飯塚　由美*・直良　博之*・名和田清子*・白川　浩*

概　　要

大学が統合・法人化する前年と統合した年の2年間，両大学（統合後は両キャンパス）の公開講座において“連携講座”を企画・実施した。“連携講座”は「豊かな食のあり方育て方」をテーマに5回シリーズで展開し，10名の教員が講師を務めた。今回はこの体験から，“連携講座”の意義と課題についてラベルワークにより検討した。

意義と課題のラベルを図解化した結果，私たちの目指す“連携講座”とは「教員が輝く学びの風土づくりと知の融合・創造によって，特徴にあふれた多彩で魅力的な講座を企画し，市民に活力を与える！」講座である。よりよい連携講座を展開するためには，4つのカテゴリーで対策を講ずる必要がある。

キーワード：公開講座，連携講座，ラベルワーク，地域貢献

Ⅰ．緒　　言

大学等の公開講座は，大学等が持っている専門的・総合的な教育・研究機能を社会に開放することにより，生活上・職業上の知識，技術及び一般的教養を身に付けるための学習の機会を広く社会人等に対して提供するものである（放送大学，2007）。大学等の公開講座は，平成18年度は全国で約23,400講座が開設され，約111万人が受講し，年々活発化している（放送大学，2007）。

島根県立看護短期大学における公開講座は，学則に謳われている地域開放事業に位置づけられ，開学時より実施してきた。島根県立看護短期大学と島根県立島根女子短期大学は平成19年4月に統合・法人化し，島根県立大学短期大学部となった。大学が統合・法人化する前年の平成18年と統合した平成19年の2年間，両大学（統合後は両キャンパス）の教員が公開講座において“連携講座”を企画・実施した。実施に伴い，担当した教員にはその利点やそれに伴う課題などが見えてきた。そこで，参画理論に基づく実施者参画型のラベルワーク技法を研究データの分析に用いることを試み，検討する必要性を感じた。

ここで述べる“連携講座”とは，両キャンパスの教員が協同して一つのテーマをシリーズで展開した公開講座である。また，ラベルワークとは，林により開発された概念であり，人間の知的活動，とりわけ知識の発信・交流および図解思考の道具としてラベルを用いる理論と技術の体系である（林，2004）

今回は，“連携講座”を担当した教員が思った連携講座の意義と課題から，我々が目指す連携講座について明らかにし，その結果から公開講座としての連携講座について考察する。

Ⅱ．方　　法

1．調査対象とデータおよび分析の方向性

対象は，“連携講座”の講師を務めた出雲キャンパス5名と松江キャンパス5名の合計10名の教員である。

*松江キャンパス

データは10名の教員が記述したラベル60枚で，ラベルは２つのテーマで３枚ずつ記載した。ラベルのテーマは①「“連携講座”の意義だと思うこと」，②「“連携講座”を実施して課題だと思うこと」である。図解のテーマは「私たちの目指す連携講座とは？」である。

２．分析手順

分析はラベルワークの経験がある３名の教員が行い，図解化した。具体的な手順を以下に示す。

①対象が２つのテーマで各３枚ずつ書いたラベルを，研究者３名がラベルを１枚ずつ読み，同じ意味・似ている意味のラベルを小皿に分け，看板を付ける。１個の小皿には３枚以上のラベルを合わせないように注意し，看板はラベルが言わんとすることを１文で表す。

②小皿同士が似ているものを集めて大皿に分け，同様に看板を付ける。

③テーマが問で答え（タイトル）を導き出すよう配置し，俯瞰的に思考しながら図解を作成する。

④できあがった図解を見ながら，最終的にその図解全体が言わんとすることを一文で表したタイトルを付ける。

３．“連携講座”の概要

平成18年度と平成19年度の“連携講座”プログラム概要を表１に示した。テーマは，最近の身近な話題である心・食・育について市民と共に考えてみたいと思い，「豊かな食のあり方・育て方」とした。

平成18年度は大学が夏季休業期間中の８月下旬から９月下旬の木曜日に，午後の２時間を使い，ⅠからⅤの５回シリーズで毎週開催した。また，各回の講師は，出雲キャンパスと松江キャンパスの教員が専門領域に配慮してペアとなり担当した。平成19年度は，昨年の状況や反省から，小・中学校が夏休みである７月下旬から９月上旬までの土曜日に，午後の２時間半とし30分間時間を延長した。平成18年同様の５回シリーズで，お盆の期間を除いて毎週開催した。各回の講師は，Ⅰ・Ⅱを出雲キャンパスの教員，Ⅳ・Ⅴを松江キャンパスの教員，Ⅲを出雲と松江キャンパスの教員が担当した。また，担当以外の講座にも参加するように努力し，Ⅴは両キャンパスの教員６名が質疑に加わった。平成19年度は，会場となる松江キャンパスの学科再編等の関係で，平日の会場使用や授業期間中に講座の担当が困難などの諸事情もあり，調整した結果である。

表１　“連携講座”のプログラム概要

平成18年度	平成19年度
豊かな食のあり方、育て方	
時間：13:30～15:30	時間：13:30～16:00
Ⅰ　**子どもの脳と食事**	Ⅰ　**脳と味覚**
開催日：8月24日(木)	開催日：７月28日(土)
講　師：出雲＆松江	講　師：出雲＆出雲
Ⅱ　**味覚とおいしさの心理**	Ⅱ　**身体と心の健康**
開催日：８月31日(木)	開催日：８月４日(土)
講　師：出雲＆松江	講　師：出雲＆出雲
Ⅲ　**心の健康と音楽**	Ⅲ　**加齢のメカニズムと高齢者の食**
開催日：９月７日(木)	開催日：８月18日(土)
講　師：出雲＆松江	講　師：出雲＆松江
Ⅳ　**加齢のメカニズムと高齢者の食**	Ⅳ　**食の価値観と情報**
開催日：９月14日(木)	開催日：８月25日(土)
講　師：出雲＆松江	講　師：松江＆松江
Ⅴ　**生活習慣病と食生活**	Ⅴ　**おいしい食事作り**
開催日：９月21日(木)	開催日：９月１日(土)
講　師：出雲＆松江	講　師：松江

注）講師の出雲や松江は所属するキャンパスを示す。

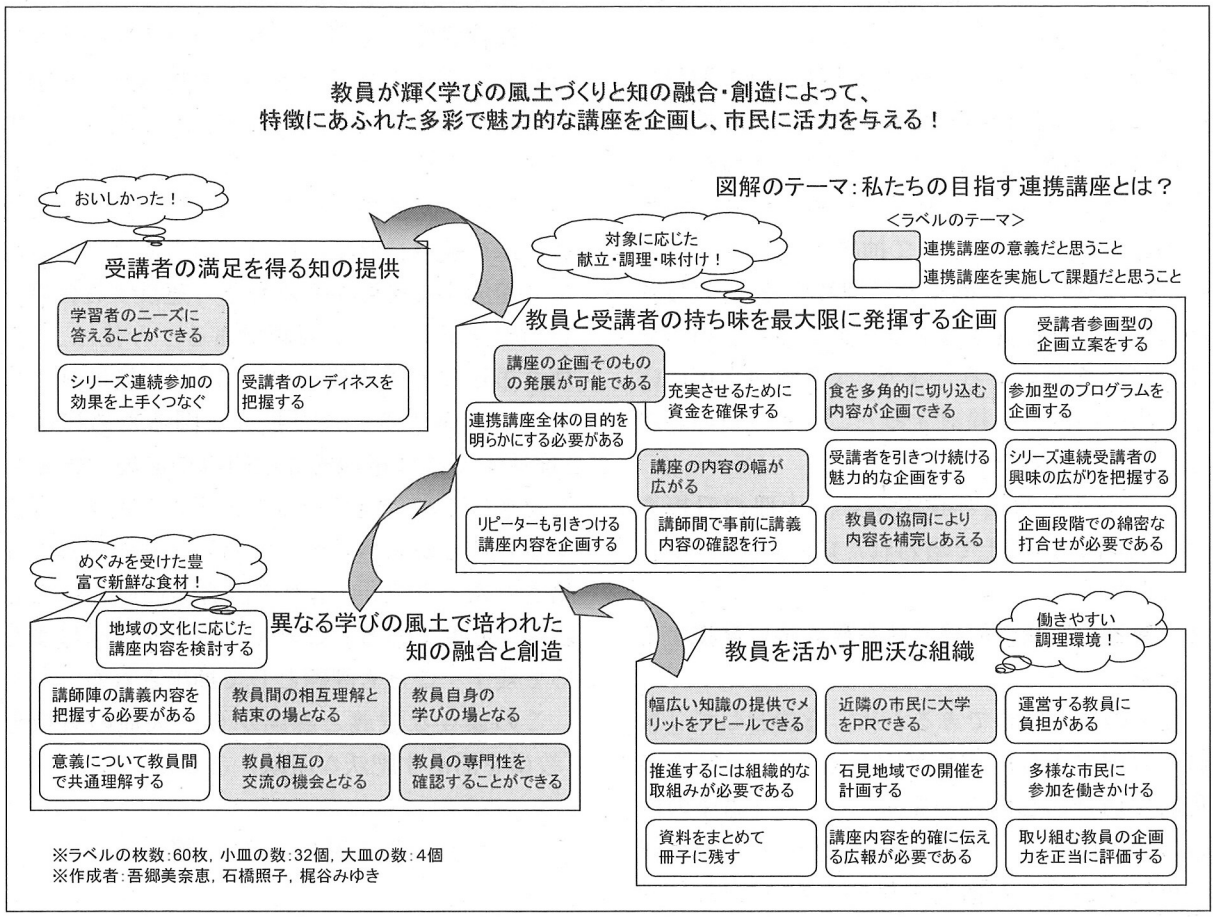

図1 ラベルワークによる連携講座の意義と課題

“連携講座”の案内は2年間とも各キャンパスで作成される公開講座リーフレットで行った。受講受付は，平成18年度は出雲キャンパス，平成19年度は出雲と松江の両キャンパスで行った。また，5回シリーズでの開催であるが，希望する回だけの参加も可能とした。

受講者数は毎回30名程度で，年代の幅は広く，女性が9割程度を占めていた。また，シリーズ全体を通して受講した者が5割を占めており，受講者の9割が3回以上参加していた。2年間引き続き受講した者も数名いた。毎回のアンケートによる評価ではテーマや内容，時間配分や進行，理解のしやすさのいずれも良い評価で，満足感も高かった。

Ⅲ．結　　果

ラベルワークにより，意義（ラベル30枚）と課題（ラベル30枚）のラベルからカテゴリー化した小皿と大皿の図解を図1に示した。図解のテーマは「私たちの目指す連携講座とは？」で，図解のタイトルは「教員が輝く学びの風土づくりと知の融合・創造によって，特徴にあふれた多彩で魅力的な講座を企画し，市民に活力を与える！」となった。また今回のテーマは,より良い方向性を導き出すごとであり，我々の図解思考の過程からも，意義と課題を合わせて検討することが妥当と判断した。

意義の元ラベル30枚を11個の小皿に，課題の元ラベル30枚を21個の小皿にまとめることができた。この小皿をテーマで図解思考した結果，4個の大皿で示すことができた。

この図解を「食」にたとえて表現すると，受講者に「おいしかった！」と満足してもらえる「対象に応じた献立・調理・味付け！（企画）」をするために，「めぐみを受けた豊富で新鮮な食材！（教員）」を「働きやすい調理環境！（組織）」で作ることである。

以下に，図解の大皿で示した4つのカテゴリー毎に意義と課題について述べる。

1．異なる学びの風土で培われた知の融合と創造

異なるキャンパスで様々な専門領域の教員にとって，「教員自身の学びの場となる」「教員の専門性を確認することができる」「教員相互の交流の機会となる」「教員間の相互理解と結束の場となる」が意義として抽出された。しかし，「意義について教員間で共通理解する」「教授陣の講義内容を把握する必要がある」など担当する教員の課題もある。また，「地域の文化に応じた講座の内容を検討する」ことも教員の課題として抽出された。

このような意義と課題から，大皿の看板を『異なる学びの風土で培われた知の融合と創造』とした。

2．教員と受講者の持ち味を最大限に発揮する企画

教員の知が融合できるため，意義として「教員の協同により内容を補完しあえる」「食を多角的に切り込む内容が企画できる」「講座の内容の幅が広がる」「講座の企画そのものの発展が可能である」が抽出された。そのため，「受講者を引きつけ続ける魅力的な企画をする」「シリーズ連続受講者の興味の広がりを把握する」ことが必要であり，「受講者参加画型の企画立案をする」「参加型のプログラムを企画する」とともに「企画段階での綿密な打合せが必要である」「講師間で事前に議事内容の確認を行なう」「リピーターも引きつける講座内容を企画する」ことが課題として抽出された。また，「連携講座全体の目的を明らかにする必要がある」が「充実させるために資金を確保する」ことも課題として抽出された。

このような意義と課題から，大皿の看板を『教員と受講者の持ち味を最大限に発揮する企画』とした。

3．受講者の満足を得る知の提供

教員が連携することから「受講者のニーズに答えることができる」が意義として抽出された。そのためには「シリーズ連続参加の効果を上手くつなぐ」「受講者のレディネスを把握する」ことが課題として抽出された。

このような意義と課題から，大皿の看板を『受講者の満足を得る知の提供』とした。

4．教員を活かす肥沃な組織

“連携講座”を担当する教員は大学の組織に所属し，支えられている。“連携講座”を実施する組織としての意義は，「幅広い知識の提供でメリットをアピールできる」と「大学のＰＲができる」が抽出された。しかし，運営する教員には事前打合せや，自分が担当する講座以外にも参加する必要があるなど「運営する教員に負担がある」ことが課題である。今後は，「多様な市民に参加を働きかける」「石見地域での開催を計画する」など拡大を図るためには，「推進するには組織的な取組みが必要である」とともに「取り組む教員の企画力を正当に評価する」ことが求められ，これらが課題として抽出された。また，「講座の内容を的確に伝える広報が必要である」ことや「資料を冊子にまとめて残す」ことも課題として抽出された。

このような意義と課題から，大皿の看板を『教員を活かす肥沃な組織』とした。

Ⅳ．考　　察

公開講座は「開かれた大学」の具体的イメージとして一般市民に開設することが各方面から要請されている（宮坂，1997）。大学を取りまく環境は「18歳人口の急減」で社会人に対する関心が増大，「経済・雇用環境の変化」で転職や職場内で昇進等のためキャリアアップ，「若年者（フリーター，ニート）問題」で就業のためのスキルアップ，「団塊の世代の大量定年問題」で定年後の生きがいづくりや再就職のためのスキルアップから，公開講座は大学の「第三の使命」である（中央教育審議会，2005）。このことからも，我々が公開講座で企画・実施した“連携講座”は重要な意義がある。また，大学が統合する前年の平成18年と統合した平成19年の２年間に実施したタイミングにも重要な意義があった。

「公開講座の現状及び担当教員への評価に関する調査」では（放送大学，2007），短大・高専における開放事業重視度は「非常に重視されている」38.9%，「ある程度重視されている」57.3%で，96.2%が重視されていると答えており，大学の96.7%と差はない。また，大学，短

大・高専ともに公開講座を「社会貢献」として位置づけている比率が最も高く，「収入方策」としてはさほど重要視されていない。公開講座を担当した教員への手当に関しては「謝金・給与に反映」が大学は56.8%，短大・高専は46.5%で，「手当なし」は大学が38.7%，短大・高専は48.1%である。我々の所属する両キャンパスにおいては手当はなく，開催地や講座内容等の企画は個々の教員に委ねられているところが大きい。今後は，教員も持ち味を引き出す企画が望まれることから，組織的な取組みが必要である。

一般に公開講座の内容は「専門・職業」「語学」「現代的課題」「一般教養」に分類されており，我々が行った“連携講座”は「現代的課題」であったと考えられる。“連携講座”を担当した教員は，連携の意義を認識しており，その意義をかなえるための課題も明確である。今回は，食をキーワードに“連携講座”として企画したが，各キャンパスの学生教育やそれに伴う会場等の調整から開催日等には制約があった。そのため，我々が望ましいと考えた企画を実情にあわせて調整した。

“連携講座”を担当した教員10名の意義と課題を図解化した結果，4カテゴリー（大皿）に分類された。1つ目は，教員の連携から生れる『異なる学びの風土で培われた知の融合と創造』。2つ目は，教員を活かして受講者の特徴を把握した『教員と受講者の持ち味を最大限に発揮する企画』。3つ目は，受講者のニーズに答える『受講者の満足を得る知の提供』。4つ目は，教員が所属する組織として『教員を活かす肥沃な組織』。今回，図解化する過程から，ラベルのテーマ①「“連携講座”の意義だと思うこと」と②「“連携講座”を実施して課題だと思うこと」は表裏であり，どのカテゴリーにおいても意義となるための課題が多くあることが明らかであった。また，意義と課題を別々に検討しても，一つのより良い方向性を導き出すことには困難である。今回，ラベルワークによる図解思考の結果，意義と課題を合わせて検討して示した。その結果，一つの方向性を導き出すことができた。

統合・法人化した大学の課題は，開かれた大学として使命を果たすために，教員を活かす組織づくりである。公開講座は大学の「第三の使命」であることから，公開講座を実施し社会の期待に応えることで，各キャンパスのさらなる発展を図ることが重要である。今後は，この課題が十分に検討され，他大学の例にあるように連携室や方針を打ち出すなど，大学内・外に見える形で具体的に対策を示すことが急務と考えられた。

V．結　　論

“連携講座”を担当した10名の教員が連携講座の意義と課題について，ラベルワークにより図解化した。

その結果，私たちの目指す“連携講座”とは，「教員が輝く学びの風土づくりと知の融合・創造によって、特徴にあふれた多彩で魅力的な講座を企画し，市民に活力を与える！」講座である。よりよい連携講座を展開するためには，「異なる学びの風土で培われた知の融合と創造」「教員と受講者の持ち味を最大限に発揮する企画」「受講者の満足を得る知の提供」「教育を活かす肥沃な組織」の4つのカテゴリーで対策を講ずる必要がある。

文　　献

中央教育審議会：我が国の高等教育の将来像（平成17年1月28日答申），2005-01-28，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm

林義樹，金城祥教(2004)：看護の知を紡ぐラベルワーク技法(第1版)，27-51，日本精神看護出版，東京．

放送大学：大学等開放推進事業（文部科学省委託事業）について，2007-06-07，http://www.u-air.ac.jp/hp/tyousa/kaihou/index.html

宮坂広作（1997）：大学改革と生涯学習(第1版)，245-356，明石書房，東京．

吾郷美奈恵・石橋　照子・梶谷みゆき・山下　一也・福澤陽一郎
奥野　元子・飯塚　由美・直良　博之・名和田清子・白川　　浩

A Significace and a Problem of Collaborative Lectures by Using the Label Work

Minae AGO, Teruko ISHIBASHI, Miyuki KAJITANI, Kazuya YAMASHITA,
Yoichiro FUKUZAWA, Motoko OKUNO, Yumi IITSUKA, Hiroyuki NAORA,
Kiyoko NAWATA and Kouichi SHIRAKAWA

Key Words and Phrases: a universty extension course, collaboratire lectures, label work, contribution to the community

---

*Matsue Campus